

大学院教育の現状と課題

よしだ かつみ
吉田 勝美

1. はじめに

1. 1. 経緯

昭和 52 年 4 月本学大学院は設置認可され、本学における卒後の研究に関する高度専門教育にあっている。本学では、国内外の先端研究の一翼を担うべく研究を推進するとともに、将来臨床家を目指す学生に研究を通じた論理的思考や問題解決能力を修めるように指導することで、臨床の質の向上を図ることを支援している。

1. 2. 卒後臨床研修の必修化による変化

平成 16 年度から臨床研修の必修化が開始され、医学部卒業生に 2 年間の臨床研修が義務化された。研修の義務化に伴い、大学病院以外の医療施設での研修を希望する卒業生が増加するとともに、学位取得よりも専門医志向により、全国的に大学院希望者が全国的減少した。本学でも同様の傾向を示したものの、卒業生の約半分が学位の取得を希望していることも知られている。

1. 3. 医療系大学院の特徴

従来大学院は将来の研究者を養成することを目的に、研究が主体と占めていた。

一方、大学院の将来像として高度専門家を養成することを目的に、コースワークを通して認定医・専門医取得を支援する大学院教育へと目的が多様化してきた。

1. 4. 大学院の使命の変化

専門医が医療の向上に繋がるという国民の期待を受け、医師の高度専門教育への充実を考えると、医療系大学院の社会的ニーズも変化しているのが現状である。

特に、科学的倫理的マインドを持った臨床医を養成することが喫緊の課題となっている。

1. 5. 本学大学院の方向性

現在、「中教審医療系 WG 報告書に対するまとめと提言(案)」(<http://www.mext.go.jp/b-menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05090501/020.htm>)に基づき、本学大学院では将来の医療系大学院の在り方を検討しており、本稿では現在の大学院について紹介するとともに、将来の大学院構想についても言及する。

2. 現状

2. 1. 入学に際して

大学院の入学は、臨床に関わる専攻分野にあっては臨床研修の修了(見込み)を以て受験資格としている。また、医師でない場合には 4 年生の大学卒業後、2 年以上の前期大学院を修了していることを条件としている(詳細については募集要項を参照)。また、出願する際にはあらかじめ専攻分野の指導教授の了解を得ることが求められている。

入学試験は入学前年の 11 月上旬に予定されており、必要に応じて第二次募集を行う。

入学試験は、語学試験と希望専攻分野の筆記試験、面接を行っている。

2. 2. 専攻分野の拡充

多彩な学術領域に対応するため、平成 18 年度から 4 つの新専攻分野が開設された。平成 19 年度の専攻分野は表 1 に示す 42 分野であり、学術的視点から専攻分野の増設を随時行うことで、学術の発展に対応している。

2. 3. 学生数

医学研究科は 1 学年 60 名の定員で募集している。文部科学省の指導により、各指導教授は 1 学年 2 名を原則として、全学年で 8 名の学生を指導できている。

表 2 には、最近の大学院生数を示す。定員の 6 割前後で十年前に比べ緩やかに減少している。

表1 平成19年度 大学院担当教員◎指導教員

	専攻分野(コース)	職	氏名
1	生体構造学	教授	平田 和明
2	生体統制制御学	教授	明間 立雄
3	生体分子病態学	教授	加藤 智啓
4	臨床微生物・感染制御学	教授	中島 秀喜
5	生体機能制御・薬物治療学	教授	小林 真一
6	病理病態学	教授	田所 衛
7	再生医学・免疫病態医学	教授	鈴木 登
8	健康・環境制御医学	教授	吉田 勝美
9	法医学	教授	向井 敏二
10	難治性疾患病態制御学	教授	西岡 久寿樹
11	脳情報制御医学	教授	松井 宏晃
12	内科学(総合診療内科)	教授	松田 隆秀
13	内科学(呼吸器・感染症内科)	教授	宮澤 輝臣
14	内科学(循環器内科)	教授	三宅 良彦
15	内科学(消化器・肝臓内科)	教授	伊東 文生
16	内科学(腎臓・高血圧内科)	教授	木村 健二郎
17	内科学(代謝・内分泌内科)	教授	田中 逸
18	内科学(神経内科)	教授	長谷川 泰弘
19	内科学(血液・腫瘍内科)	教授	三浦 俊久男
20	内科学(リウマチ・膠原病・アレルギー-内科)	教授	尾崎 承一
21	小児科学	教授	小坂橋 靖
22	神経精神科学	教授	山口 登
23	放射線医学	教授	中島 康雄
24	皮膚科学	教授	相馬 良直
25	泌尿器科学	教授	高橋 剛
26	外科学(消化器・一般外科)	教授	大坪 毅人
27	外科学(心臓血管外科)	教授	幕内 晴朗
28	外科学(呼吸器外科)	教授	長田 博昭
29	外科学(小児外科)	教授	北川 博昭
30	外科学(乳腺・内分泌外科)	教授	福田 護
31	脳神経外科学	教授	橋本 卓雄
32	整形外科学	教授	別府 諒兄
33	産婦人科学	教授	石塚 文平
34	眼科学	教授	上野 聰樹
35	耳鼻咽喉科学	教授	肥塚 泉
36	麻酔学	教授	館田 武志
37	形成外科学	教授	熊谷 憲夫
38	救急医学	准教授	平 泰彦
39	遺伝子多型・機能解析学	准教授	熊井 俊夫
40	フロンティア医科学	教授	中島 利博
41	応用分子腫瘍学	准教授	太田 智彦
42	スポーツ医学	教授	河野 照茂

2. 4. 指導教員

専攻分野は研究科委員会で承認された◎指導教員と合の指導教員から構成されて研究指導にあっている。平成19年度は◎指導教員は42名、合指導教員は185名で構成されている。

2. 5. 研究体制

近年の研究の進展により、研究に必要とされる機材備品は高度化している。本学では、大学全体として効率的に研究環境を整備することを目的として、大学院附属研究施設を設立して、共同利用により機器の有効利用を図っている。

大学院附属研究施設には、アイソトープ研究施設、実験動物飼育管理研究施設、電子顕微鏡研究施設、医用生体工学研究施設、先端医学研究施設(分子生物部門、培養研究部門、プロテオミクス研究部門、再生医学研究部門)が設立され、各専攻分野の研究を支援している。

2. 6. カリキュラム

各専攻分野の学生は、分野により指定された必修科目24単位、選択科目6単位を4年修了時点までに習得する必要がある。

この他、在学中には、大学院特別講義(年10回)の受講と研究科長が認める特別講義を受講することが義務づけられている。

2. 7. 学位論文としての種別

学位審査を受ける論文は、査読制度のある専門誌(聖マリアンナ医科大学雑誌も含む)に原著論文として掲載(または掲載証明が得られる)されることが求められる。

2. 8. 学位申請基準

学位取得に関しては、4年間の課程を修了して取得する学位(甲種)と5年以上の研究期間を経て論文審査により取得する学位(乙種)の2種類がある。

2. 8. 1. 課程による博士

指定された単位を修得した上で、学位申請論文を研究科委員会に提出し、研究科委員会で投票により認められた者に学位が授与される。

申請論文は、原則として単著であるが、筆頭著者である共著論文も認められている。申請時には指定された主副論文と主論文要旨を提出し、受理審議委員会を議を経て、研究科委員会の審査資格(一審)の承認を得る。一審承認後、審査委員会が組織され、主査1名副査2名のもとで学位審査が行われ、その結果が研究科委員会に報告される。研究科委員会で審査委員会の報告をもとに審議し、最終的に投票により学位論文としての可否が決定される。

なお、現在主査については、大学院教学委員会が研究内容に合わせて、指導教授を指名する形式を取ることとして、審査の透明性を高めている。

2. 8. 2. 論文による博士

研究生として所定の年限を修了した者が学位を請求することができる。論文による博士の場合、平成17年よりあらかじめ語学試験に合格していることが学位申請の条件となっている。

学位申請の手続きについては、課程による博士の場合と同様の手続きを経て行われる。

2. 9. 学位授与数(この10年)

表3に学位授与数の年度推移を示す。学位論文に占める英文論文頻度は課程による博士論文では40%以上であり、論文博士でも英文論文頻度が増加してきている。

表2 学生数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	合計
平成8年度	50	41	47	46	184
平成9年度	49	50	41	46	186
平成10年度	47	48	49	42	186
平成11年度	43	47	48	47	185
平成12年度	40	42	45	48	175
平成13年度	36	40	42	45	163
平成14年度	44	36	39	41	160
平成15年度	50	43	36	37	166
平成16年度	35	48	42	36	161
平成17年度	36	33	48	40	157
平成18年度	31	35	33	48	147
平成19年度	34	30	35	33	132

表3 学位授与状況

	課程(甲)博士	英論文割合	論文(乙)博士	英論文割合	合計	英論文割合
平成12年度	46(5)	10.9	19(5)	26.3	65(10)	15.4
平成13年度	45(12)	26.7	16(3)	18.8	61(15)	24.6
平成14年度	38(16)	42.1	14(3)	21.4	52(19)	36.5
平成15年度	37(18)	48.6	13(7)	53.8	50(25)	50.0
平成16年度	41(21)	51.2	15(9)	60.0	56(30)	53.6
平成17年度	36(16)	44.4	7(2)	28.6	43(18)	41.9
平成18年度	47(19)	40.4	10(4)	40.0	57(23)	40.1

()内は英論文数

近年の学位申請論文の特徴として、英文論文の数が増加してきており、大学院における研究指導の質的向上が図られていることが理解される。

2. 10. 本大学院の特徴

本大学院の特徴として、学位取得率がほぼ100%であることが挙げられる。また、4年間の在学期間中に取得する者が大半であり、大学院入学後、指導教授を中心とした指導体制の充実、学内の大学院付属研究施設を利用しての先端的研究の支援などが関係している。

2. 11. 優秀論文に対する3年次審査

一定の学術的水準(インパクトファクターによる基準)を有する学術誌に掲載された論文に対して、3年次に学位申請を認めている。この制度を利用することで、学位取得後の留学などの自由度が高くなるとともに、1年間の大学院修学期間を短縮できるメリットがある。

3. 今後の医療系大学院

近年、医療界において専門医志向に加え、科学的医療の充実が求められる中、大学院に求められる機能は大きく変化している。研究主体の大学院から科学的思考や専門的技能を修得できる環境を大学院が提供することが求められている。

研究職のみでなく、高度専門能力として認定医・専門医の取得を目指すことが求められていることから、専門科目の充実を図ることが必要であり、現在各専攻分野において検討が開始されている。また、生涯にわたる研究の継続を支援する目的で、大学院共通カリキュラムとして、臨床研究計画、倫理、研究申請書の作成と申請、データ収集と解析、科学論文の作成、知的財産に関する取扱いを予定している。他大学との共同事業として、がんプロフェッショナル養成プラン(文部科学省 <http://www.mext.>

go.jp/a-menu/koutou/kaikaku/gan.htm) の導入についても検討を始めている。

養成を目指して、研究教育の独創化を進めており、大学が提供する生涯教育の一端を担い、医療の質の向上を目指している。

4. まとめ

本大学院では医療系大学院としての高度専門職の

—— コラム ——

現在、平成 20 年度から医療系大学院の一部開設を予定している。開設予定専攻分野は、内科学、外科学、臨床腫瘍学の三分野である。

医療系大学院では、本学の任期付助教であっても入学が認められる点、4 年間一つの専攻分野に限らず、複数の領域をコースワークを通して履修することにより、幅広い知識と技術の習得を可能にするものであり、認定医・専門医の取得を支援することを目標にしている。

例えば、外科学では複数の専門分野をローテートすることにより、広いスキルアップが可能であるとともに、在学中に学生の希望により特定の専門分野のコース取得単位を増やすなど、学生のニーズに合わせた単位取得も可能である。

医療系大学院の学位取得に関しては、基本的には従来と同様に原著論文の作成を以て学位申請に充てるよう現在検討中である。